

明大生へのアピール

戦旗派に生協全組合員への自己批判を要求する

明大生協効動組合

生協全組合員諸君！ 全ての学生・教職員諸君！

我々は1月13日戦旗派が出した「生協問題に対する我々の見解」なる文章のミタラメさを厳しく糾弾することも、我々自身が体験した全ての経過を別紙資料として掲げしめし、次の通り宣言する。

我々生協従業員は、戦旗派からの明大生への対する政治献金要求を一切認めてはできない。彼らの文章にある、学生会人等の合意の中で「情況派」が生協を通じて政治献金を申し入れたとするにつき、我々は農学部・互学院両学生会に照会した。その結果、12月13日学生大会の後に、（それ以前から数回の交渉があった）中執人事・中執予算部分につき合意をみた。しかし学生会組織の範囲を越え専門組織に影響を及ぼすような提案はしていないとの解答を得た。

生協の加盟組合員による出資金を基礎にし、その運動の方針性は生協総代会の決定により運営されている。従って、出資金・運営剩余金は運動方針に従って使用されるものである。生協活動、組合内の学生・教職員の消費生活の防衛、組合員相互の協同による生活防衛を軸に設立された。近年の日本資本主義によるインフレ政策と対外膨張（侵略）の激化は大衆の日常生活を悪化させしめ、消費生活においても種々の大衆収奪の攻撃が行われるに至っている。明大生は六七八年度の総代会において「地盤生協設立」を運動方針として採択し、種々の経験の検討、他生協の運動的実績を通じて、現在進行形で、多摩ニュータウンを軸に多摩生協の設立を実現している。大資本の攻勢・地盤住民のオルタナ活動・種々の小作地盤の排除の実績等、生協従業員は24時間をかけて生協運動に投入してきた。地盤生協は、「共同労働・共同消費・共同分配」の理念の下、帝国主義の地盤住民支配に對する社会的な目標の実現を目指すものである。我々は帝国主義的階級斗争を実現し抜くにあたって、こうした活動をも当然なされるべきものとして総代会の決定を支持し、生協従業員として身命を賭してきている。

我々は戦旗派が「生協に投げてきたから献金を多けるのは当然だ」と語る時、何を持って「快力」と読むのかを明らかにしてもらわなければならぬ。彼らが前記の主義の原則をふまえ、68年総代会以降の運動方針を支持してきたとするなら、一切党派的ひ政治献金を要求する根拠を持たないはずである。

又我々は次の点を指摘しないわけにはならぬ！それは彼らが今度の政治献金を要求するにあたって、生協が年額30万円を限度に行ってきた学生会館運営委員会に対する助成金、そして和泉学生会館口に一への書籍部席席に際しての寄附金への供託金30万円を学生会中央執行委員会へ委託することを方便として実現的に戦旗派への献金を要求してきたことである。我々は現在、学生会館運営のために使用されるべきものを彼らに渡すことを一切拒否する。我々は彼らが恫喝と暴力で自からの権力を維持することにのみ奔走し、大衆的運動が彼らの意に反して起ることを恐れ、69年10月今日のロックアウト以降、一切明大における大衆運動の先頭に立つことがなかったこと、そうであるが故に学館運営委員会は統一廻事連への附帯者であったことを指摘しなければならない。革命的大衆的支持の下に学生会を維持するのではなく、恫喝と暴力によって党派支配を維持しようとする、そのような政治に対する考え方を徹底的に弾劾する。我々は彼らが前記のような方便を使って献金を要求してきたことは、まさしく出資金によって運営される生協の「超過利潤」の「分け前」を全く私的に要求してきたものと考えざるを得ない。そしてこれとまた生協への「快力」とは縁ゆかりのないものである。

我々は對抗派に対し、生協への政治献金要求を全組合員に自己批判することを要求する。

そしてまた、大衆運動の権利を党派的に喰い物にしようとするどのような政治を弾圧粉碎する。

1月13日、本校生協商店に従事していた労組員が彼らに拉致され、「従業員の名簿は手に入った。徹底してテロをやるからな」との脅威を受けてきた真実は我々にあり、真実はテロによって消すことができない。我々はテロによる運動の歪曲を大衆的な包囲によりせん滅するであろう。

我々生協労組員は、専従者としての全生活と、生協運動活動家としての全存在を賭して勝利の日まで斗争することを宣言する。

生協組合員諸君！ 学生・教職員諸君！ 又斗う全ての同志諸君！

我々は渾身の力をこめ以上の決意を宣言し、大衆運動の原則的保障を実現、完遂する戦いに同志諸君が結集されんことを呼びかける。

嘲諷政治・悲劇政治を粉のごとく碎き、我々明治大学での、あるいは全国でのヨーロッパ的創造性と創造性と想像性を獲得せんとする斗争に再度、全ての斗う同志諸君が結集されんことを呼びかけるのである。

1972.1.18

